

走れメロス

太宰治

メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治が分からぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。今日未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里離れたこのシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母もない。女房じふぼうもない。十六の、内気な妹と二人暮らしだ。この妹は、村のある律儀りちぎな一牧人を、近々、花婿として迎えることになっていた。結婚式も間近なのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣装やら祝宴のこちそつやらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今はこのシラクスの市で、石工いしくをしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく会わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った。ひっそりしている。もつすべに日も落ちて、

十里＝一里は
約三・九キロ
メートル。

シラクス＝
シラクサまたは
シラクーザとも
いう。イタリア
のシチリア島南
東海岸にある都
市。
紀元前八世紀こ
る栄えた。

町の暗いのは当たり前だが、けれども、なんだか、夜のせいばかりではなく、市全体が、やけにさびしい。のんきなメロスも、だんだん不安になってきた。道で会った若い衆を捕まえて、何かあったのか、二年前にこの市に来た時は、夜でも皆が歌を歌って、町はにぎやかであったはずだが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老爺らうやに会い、今度はもっと、語勢を強くして質問した。老爺は答えなかった。メロスは両手で老爺の体を揺すぶって質問を重ねた。老爺は、辺りをばばかり低声ししえで、わずか答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、といつのですが、だれもそんな、悪心を持ってはおりませぬ。」
「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、初めは王様の妹婿様を。それから、御自身のお世継よせつぎぎを。それから、妹様を。それから、妹様のお子様を。それから、皇后様を。それから、賢臣のアレキス様を。」

「驚いた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずることができぬ、といつのです。」

のころは、臣下の心をも、お疑いになり、少しくはでな暮らしをしている者には、人質一人ずつ差し出すことを命じております。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。今日は、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「あきれた王だ。生かしておけぬ。」

メロスは、単純な男であった。買い物を、背負ったままで、のそのそ王城に入っていた。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出てきたので、騒ぎが大きくなってしまった。メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をすつもりであったか。言え！」暴君ディオニスは静かに、けれども威厳をもって問いつめた。その王の顔は蒼白で、眉間のしわは、刻み込まれたように深かった。

「市を暴君の手から救つのだ。」とメロスは悪びれずに答えた。

「お前がか？」王は、憫笑した。「仕方のないやつじゃ。お前などには、わしの孤独の心が分からねぬ。」

「言つな！」とメロスは、いきり立って反駁した。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑っておられる。」

「疑うのが、正当の心構えなのだ」と、わしに教えてくれたのは、お前たちだ。人の心は、当てにならない。人間は、もともと私欲の塊さ。信じては、ならぬ。「暴君は落ち着いてつぶやきほつとため息をついた。わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「何のための平和だ。自分の地位を守るためか。」今度はメロスが嘲笑した。「罪のない人を殺して、何が平和だ。」

「黙れ、下賤の者。」王は、さっと顔を上げて報いた。「口では、どんな清らかなことでも言える。わしには、人のほらわたの奥底が見えすいてならぬ。お前だって、今にはりつけになつてから、泣いてわびたつて聞かぬぞ。」

「あめ、王は利口だ。うぬぼれているがよい。わたしは、ちゃんと死ぬる覚悟でいるのに。命いなど決してしない。ただ、」と言いかけて、メロスは足下に視線を落とし瞬時ためらい、「ただ、わたしに情けをかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えてください。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、わたしは村で結婚式を挙げて、必ず、ここへ帰ってきます。」

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。「とんでもないうそを言つわい。逃がした小鳥が帰ってくるというのか。」

「そうです。帰ってくるのです。」メロスは必死で言い張った。「わたしは約束を守り

巡邏＝
見回って歩くこと。
パトロール

憫笑＝
哀れんで笑つこと。

ます。わたしを、三日間だけ許してください。妹が、わたしの帰りを待っているのだ。そんなにわたしを信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。わたしの無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いていこう。わたしが逃げてしまつて、三日目の日暮れまで、「ここ」に帰つてこなかったら、あの友人をしめ殺してください。頼む。そつしてください。」

それを聞いて王は、残虐な気持ちで、そつとほくそ笑んだ。生意気なことを言うわい。どうせ帰つてこないに決まつている。「このつそつきにだまされたふりして、放してやるのもおもしろい。そつして身代わりの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代わりの男を磔刑たづけいに処してやるのだ。世の中の、正直者とかいふやつは、うんと見せつけてやりたいものだ。」

「願いを、聞いた。その身代わりを呼ぶがよい。三日目には日没まで帰つてこい。遅れたら、その身代わりを、きつと殺すぞ。ちよつと遅れてくるがいい。お前の罪は、永遠に許してやるつもりだ。」

「なに、何をおっしゃる。」

「はは。命が大事だつたら、遅れてこい。お前の心は、分かっているぞ。」

メロスは悔しく、じだんだ踏んだ。ものも言いたくなくなった。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの面前で、よき友とよき友は、二年ぶりで相会あひまつた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱き締めた。友と友の間は、それでよかった。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の道を急ぎに急いで、村へ到着したのは、明るく日の午前、日はすでに高く昇つて、村人たちは野に出て仕事を始めていた。メロスの十六の妹も、今日は兄の代わりに羊群よひぐみの番をしていた。よろめいて歩いてくる兄の、疲労困憊けんぱいの姿を見つけて驚いた。そつして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「何でもない。「メロスは無理に笑おうと努めた。「市に用事を残してきた。またすぐ市に行かなければならぬ。明日、お前の結婚式を挙げる。早い方がよからう。」」妹はほおを赤らめた。

「うれしいか。きれいな衣装も買ってきた。さあ、これから行って、村の人たちに知らせてこい。結婚式は、明日だ。」

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰つて神々の祭壇さいだんを飾り、祝宴の席

を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

目が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらにはまだなんの支度もできていない、ぶどうの季節まで待ってくれ、と答えた。メロスは、待つことはできぬ、どうか明日にしてくれたまえ、とさらに押して頼んだ。婿の牧人も頑強であった。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論を続けて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぼつりぼつり雨が降りだし、やがて、車軸を流すような大雨となった。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持ちを引き立て、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのもこらえ、陽気に歌を歌い、手を打った。

メロスも、満面に喜色をたたえ、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入っていよいよ乱れ華やかになり、人人は、外の豪雨を全く気にしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思った。このよい人たちと生涯暮らしていきたいと願ったが、今は、自分の体で、自分のものではない。ままならぬことである。メロスは、我が身にむち打ち、ついに出発を決意した。明日の日没

車軸を流す＝
車の軸(心棒)の
ような雨脚の
太い雨が降る意
で、大雨の様子
を表す。

までには、まだ十分の時間がある。ちょっとひと眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。そのころには、雨も小降りになっていよう。少しでも長くこの家にくずくずとどまっていたかった。メロスほどの男にも、やはり未練の情というものはある。今宵ほつせん、歓喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、

「おめでどう。わたしは疲れてしまったから、ちょっとごめんごつむって眠りたい。目が覚めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。わたしがいなくても、もうお前には優しい亭主があるのだから、決してさびしいことはない。お前の兄の、いちばん嫌いなものは、人を疑うことと、それから、うそをつくことだ。お前も、それは、知っているね。亭主との間に、どんな秘密でも作ってはならぬ。お前に言いたいのは、それだけだ。お前の兄は、たぶん偉い男なのだから、お前もその誇りを持っていろ。」

花嫁は、夢見心地でうなずいた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、「支度のないのはお互いさまさ。わたしの家にも、まといっちは、妹と羊だけだ。ほかには、何もなし。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になったことを誇ってくれ。」

花婿はもみ手して、照れていた。メロスは笑って村人たちにも会釈して、宴席か

ら立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

目が覚めたのは明るる日の薄明のころである。メロスははね起き、南無三、寝過ごしたか、いや、まだまだだじょうぶ、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。今日はぜひとも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑ってはりつけの台に登ってやる。メロスは、ゆうゆうと身支度を始めた。雨も、幾分小降りになっている様子である。身支度はできた。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢のごとく走り出た。

わたしは、今宵、殺される。殺されるために走るのだ。身代わりの友を救うために走るのだ。王の奸佞邪知を打ち破るために走るのだ。走らなければならぬ。そうして、わたしは殺される。若い時から名譽を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかった。幾度か、立ち止まりそうになった。えい、えいと大声あげて自身をしっかりと走った。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いたころには、雨もやみ、日は高く昇って、そろそろ暑くなってきた。メロスは額の汗をこぶしではらい、ここまで来ればだじょうぶ、もはや故郷への未練はない。妹たちは、きつとよい夫婦になるだろう。わたしには、今、なんの気がかりもないはずだ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要もない。

ゆっくり歩こう、と持ちまえののんびりさを取り返し、好きな小歌をいい声で歌いだした。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達したころ、降ってわいた災難、メロスの足は、はたと、止まった。見よ、前方の川を。昨日の豪雨で山の水源は氾濫し、濁流とつとつと下流に集まり、猛勢一挙に橋を破壊し、どつどつと響きを上げる激流が、こつばみじんに橋げたをはね飛ばしていた。彼はぼうぜんとして立ちすくんだ。あちこちと眺め回し、また、声を限りに呼び立ててみたが、繫舟は残らず波にさらわれて影なく、渡し守の姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上がり、海のようになっている。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながら、ゼウスに手を挙げて哀願した。「ああ、しずめたまえ、荒れ狂う流れを！時は刻々に過ぎていきます。太陽もすでに真昼時です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことができなかつたら、あのよい友達が、わたしのために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑うごとく、ますます激しく躍り狂う。波は波をのみ、巻き、あおり立て、そうして時は、刻一刻と消えていく。今はメロスも覚悟した。泳ぎきるよりほかにない。ああ、神々も照覧あれ！濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、今こそ發揮してみせる。メロスは、さんぶと流れに飛び込み、百匹

南無三〃
仏教用語。南無三寶の略。失敗した時に発する語。しまつたの意。

奸佞邪知〃
心がねじけて悪知恵があること。

繫舟〃
岸につなぎとめた小舟。ここでは渡し舟のこと。
ゼウス〃
ギリシャ神話の最高神。

の大蛇のようにのたうち荒れ狂う波を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕に込めて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、獅子奮迅の子の姿には、神も哀れと思っただか、ついに憐愍を垂れてくれた。押し流されつつも、みごと、対岸の樹木の幹に、すがりつくことができたのである。ありがたい。メロスは馬のように大きな胸震いを一つして、すぐにまた先を急いだ。一刻といえども、無駄にはできない。日はすでに西に傾きかけている。せいぜい荒い呼吸をしながら峠を登り、登りきって、ほっとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待つ。」

「何をするのだ。わたしは日の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どつどつい放さぬ。持ち物全部を置いていけ。」

「わたしには、命のほかには何も無い。その、たった一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、命が欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、」でわたしを待ち伏せしていたのだな。」

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り上げた。メロスはひょいと、体を折

り曲げ、飛鳥のごとく身近の一人に襲いかかり、その棍棒をつばい取って、「気の毒だが、正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち三人を殴り倒し、残る者のひるむすきに、さっさと走って峠を下った。一気に峠を駆け降りたが、さすがに疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かっと思ってきて、メロスは幾度となくめまいを感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三歩歩いて、ついに、がくりとひざを折った。立ち上がることができぬのだ。天を仰いで、悔し泣きに泣きだした。ああ、あ、濁流を泳ぎきり、山賊を三人も打ち倒し韋駄天、ここまで突破してきたメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れきって動けなくなるとは情けない。愛する友は、お前を信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。お前は、希代の不信の人間、まさしく王の思うつぼだぞ、と自分をしかってみるのだが、全身なえて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ。路傍の草原にころりと寝転がった。身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いなふてくされた根性が、心のすみに巣くった。わたしは、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんもなかった。神も照覧、わたしは精いっぱいに努めてきたのだ。動けなくなるまで走ってきたのだ。わたしは不信の徒ではない。ああ、できることならわたしの胸を断ち割って、真紅の心臓をお目につけたい。愛

獅子奮迅
獅子が荒れ狂うように、すばらしい勢いで奮闘すること。

憐愍
哀れみの気持ち。

韋駄天
仏法の守護神。足が速いということから速く走るものをたとえている。

と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれどもわたしは、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。わたしは、よくよく不幸な男だ。わたしは、きつと笑われる。わたしの一家も笑われる。わたしは友を欺いた。中途で倒れるのは、初めから何もしないのと同じことだ。ああ、もう、どうでもいい。これが、わたしの定まった運命なのかもしれない。セリヌンティウスよ、許してくれ。君は、いつでもわたしを信じた。わたしも君を、欺かなかった。わたしたちは、本当にいい友と友であったのだ。一度だって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことはなかった。今だって、君はわたしを無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがたい、セリヌンティウス。よくもわたしを信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、わたしは走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんもなかった。信じてくれ！ わたしは急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りてきたのだ。わたしだから、できたのだよ。ああ、この上、わたしに望みもつな。ほっっておいてくれ。どうでもいいのだ。わたしは負けたのだ。だらしがない。笑ってくれ。王はわたしに、ちょっと遅れてこい、と耳打ちした。遅れたら、身代わりを殺して、わたしを助けてくれ

15

ると約束した。わたしは王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、わたしは王の言うままになっている。わたしは、遅れていくだろう。王は、独り合点してわたしを笑い、そうしてこともなくわたしを放免するだろう。そうだったら、わたしは、死ぬよりつらい。わたしは、永遠に裏切り者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、わたしも死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけはわたしを信じてくれるに違いない。いや、それもわたしの、独りよがりか？ ああ、もういつそ、悪徳者として生き延びてやろうか。村にはわたしの家がある。羊もいる。妹夫婦は、まさかわたしを村から追い出すようなことはしないでだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。わたしは、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬるかな。四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

5

ふと耳に、^{せんぜん}潺潺、水の流れる音が聞こえた。そつと頭をもたげ、息をのんで耳を澄ました。すぐ足下で、水が流れているらしい。よろよろ起き上がって、見ると、岩の裂け目からこんこんと、何か小さくささやきながら清水がわき出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手ですくって、

15

やんぬるかな
もつおしまいだ。

潺潺＝
浅い水がよどみ
なく流れる様子。

ひと口飲んだ。ほつと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労回復と共に、わずかながら希望が生まれた。義務遂行の希望である。我が身を殺して、名譽を守る希望である。斜陽は赤い光を、木木の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。わたしを、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。わたしは、信じられている。わたしの命なぞは、問題ではない。死んでおわび、などと気のいいことは言っておられぬ。わたしは、信頼に報いなければならぬ。今はただその一事だ。走れ！ メロス。

わたしは信頼されている。わたしは信頼されている。先刻の、あの悪魔のささやきは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れている時は、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、お前の恥ではない。やはり、お前は真の勇者だ。再び立つて走れるようになったではないか。ありがたい！ わたしは、正義の士として死ぬことができるぞ。ああ、日が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。わたしは生まれた時から正直な男であった。正直な男のままにして死なせてください。

道行く人を押し分け、はね飛ばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、その宴席の真ただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬をけとばし、小川をとび越え、少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も速く走った。一団の旅人とさつとすれ違った瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「今ごろは、あの男も、はりつけにかかっているよ。」ああ、その男、その男のためにわたしは、今こんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。遅れてはならぬ。愛と誠の力を、今こそ知らせてやるがよい。風体なんかは、とつでもいい。メロスは、今は、ほとんど全裸体であった。呼吸もできず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向こうに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。

「ああ、メロス様」「うめくような声が、風と共に聞こえた。
「だれだ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。あなたのお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」「その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。」「もう、だめでございます。無駄でございます。走るの、やめてください。もう、あの方をお助けになることはできません。」「

「いせ、まだ日は沈まぬ。」「

「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。お恨み申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったならー」

「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日はかりを見つめていた。走るよりほかはない。

「やめてください。走るの、やめてください。今は御自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じておりました。刑場に引き出されても、平気でいました。王様が、さんざんあの方をからかって、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念を持ち続けている様子でございました。」

「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついてこい！ フィロストラトス。」

「ああ、あなたは気が狂ったか。それでは、うんと走るがいい。ひよっとしたら、間に合わぬものでもない。走るがいい。」

言うにや及ぶ。まだ日は沈まぬ。最後の死力を尽くして、メロスは走った。メロスの頭は、空っぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけの分からぬ大きな力に引きずられて走った。日は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消え

言うにや及ぶ
言うまでもない。

15

ようとした時、メロスは疾風のごとく刑場に突入した。間に合った。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、のどがつぶれてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。すでにはりつけの柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々につり上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆をかき分け、かき分け、

5

「わたしだ、刑吏！ 殺されるのは、わたしだ。メロスだ。彼を人質にしたわたしは、ここにいて！」「と、かすれた声で精いっぱい叫びながら、ついにはりつけ台に登り、つり上げられてゆく友の両足に、かじりついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。許せ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

10

「セリヌンティウス。」メロスは目に涙を浮かべて言った。「わたしを殴れ。力いっぱいにはおを殴れ。わたしは、途中で一度、悪い夢を見た。君がもしわたしを殴ってくれなかったら、わたしは君と抱擁する資格さえないのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子でうなずき、刑場いっぱいにはりつけ台の音高くメロスの右ほおを殴った。殴ってから優しくほほえみ、

15

「メロス、わたしを殴れ。同じくらい音高くわたしのほおを殴れ。わたしはこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生まれて、初めて君を疑った。君がわたしを殴ってくれなければ、わたしは君と抱擁できない。」

メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスのほおを殴った。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放って泣いた。

群衆の中からも、歎歎きよきの音が聞こえた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまを、まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「お前らの望みはかなったぞ。お前らは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、お前らの仲間の一人にしてほしい。」

どつと群衆の間に、歎声が起こった。

「万歳、王様万歳。」

一人の少女が、緋ひのマントをメロスにささげた。メロスは、まごついた。よき友は、気をきかせて教えてやった。

緋ひ あかね色。

「メロス、君は、真つ裸じゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく悔しいのだ。」
勇者は、ひどく赤面した。

(古伝説と、シルレルの詩から)

歎歎きよき すすり泣き。